台大日本語文研究第 22 期
2011 年 12 月，頁 93-118
2011-08-26 收稿，2011-12-06 通過刊登

漱石的《明暗》時代前期漢詩中對自然的意識
—王維的影響與否？—

范淑文*

摘要

夏目漱石自幼崇拜陶淵明、李白、王維等中國文人，小說或隨筆中也常引用到這些詩人的作品，漱石漢詩受中國文人影響可想見一斑。然而，例如大地武雄、加藤二郎、上垣外憲一等漱石漢詩研究學者均偏向陶淵明與漱石之研究，王維與漱石之研究較不受到矚目。

提及漱石漢詩中之「自然」，多數人都會同時聯想到晚年的漢詩與漱石之最高思想「則天去私」，不過，此思想並非一次完成的，而是漱石經過多年深思熟慮才領悟出之道理。此思想固然可說反映在漱石晚年的 75 首漢詩當中，但並非所有晚年漢詩均爲此思想之表現，漢詩研究學者中村宏指出大正五年九月五日所作的 157 號漢詩可視爲「一個分界點」，漱石晚年《明暗》時代之漢詩可分成前、後二期。

基於以上理由，本搞針對《明暗》時代前期漢詩、也就是 134 號—156 號共 23 首之漢詩，以詩人對自然之態度、人與自然之關係等爲探討之主要問題，並考證這些漢詩中是否受到王維之影響？藉此探討希望能對「則天去私」有一番了解。

關鍵詞：夏目漱石、王維、自然、人、則天去私

* 台灣大學日本語文學系副教授

The Positioning of Nature in Soseki's Early "*Meian*" Period Chinese poetry – Influenced by Wang Wei?

Fan, Shu-wen*

Abstract

Since an early age, Natsume Soseki had looked up to Chinese scholars such as Tao Yuan-ming, Li Bai, Wang Wei, and often cited their works in his novels and essays. These Chinese scholars hold a significant impact on Soseki and his *kanshi* (Chinese poetry). However, academics such as Daichi Takeo, Katou Jiro, and Kamigaito Kenichi mostly focused on the analysis of Tao Yuan-ming's influence on Soseki; Wang Wei's influenced is rarely contemplated.

Speaking of "Nature" in Soseki's *kanshi*, most people would relate to *kanshi* written in his later years and his ultimate goal of "*Sokutenkyoshi*". However, this ideal was not developed in one day, it took Soseki many years of pondering to formulate. It could be said that this ideal was reflected in the seventy five *kanshi* written in Soseki's late years, nevertheless, not all of these poems are manifestations of this ideology. *Kanshi* researcher Nakamura Hiroshi points out that *kanshi* number 157 written on September 5th in the fifth year of Taisho era (1917) could be seen as a "dividing point", separating Soseki's *Meian* Period *kanshi* into two intervals.

Based on the above deductions, this paper aims to address the poet's attitude towards nature and the relationship between humanity and nature, focusing on Soseki's early *Meian* period *kanshi*, explicitly the twenty

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

three *kanshi* from number 134 to 156. Moreover, this paper would also discuss whether these *kanshi* were influenced by Wang Wei, in hopes of gaining further insight into Soseki's "*Sokutenkyoshi*" philosophy.

Keywords: Natsume Soseki, Wang Wei, Nature, Humanity, Sokutenkyoshi

漱石の『明暗』時代前期の漢詩における自然への目
——王維の投影を考えながら——

范淑文*

要旨

夏目漱石は幼い頃より、陶淵明や李白、王維など中国の文人に傾倒し、小説や随筆などにそれらの詩人の漢詩をしばしば盛り込んだりしていた。これらのことから、漱石の漢詩が中国の文人に影響されていたのは明らかであろう。が、例えば、大地武雄、加藤二郎、上垣外憲一などの漱石漢詩研究者はいずれも陶淵明と漱石との比較に偏っている傾向がある。それに較べ、王維と漱石との研究はあまり注目されていない。

漱石の漢詩における自然といえば、誰しもが晩年の漢詩を思い起こすと同時に、漱石思想の究極である「則天去私」を連想するだろう。が、この「則天去私」という思想は一足飛びに出来上がったものではなく、漱石の中で自分とじっくり向き合い、漸く纏まった思想であろう。この思想の反映と思われる晩年の漢詩の数は 75 首にも上っているが、全て「則天去私」の思想の反映とは限らない。中村宏氏によれば、大正五年九月五日に作られた 157 番の漢詩は「一つの分岐点」と看做すことができ、『明暗』時代の漢詩は前期と後期に分けられる。

よって、今回は『明暗』時代の前期、つまり、134 番から 156 番までの 23 首の漢詩に焦点を合わせ、自然への姿勢や自然と人間との関係などの問題を意識しながら、漱石のそれらの漢詩に、王維の投影の有無やまた漱石の再構築の部分について考察してみる。こうした考察を通して、更に、「則天去私」の一端を垣間見することを小論

* 台湾大学日本語文学科副教授

の主旨とする。

キーワード：夏目漱石、王維、自然、人間、則天去私

漱石の『明暗』時代前期の漢詩における自然への目
――王維の投影を考えながら――

范淑文

一、はじめに

夏目漱石は、明治四十三年の所謂修善寺大患を一つの契機として、留学以来、およそ十年ほどのブランクはあったものの漢詩の創作を再び始めた。特に晩年の『明暗』の執筆中に作った七十五首の漢詩はテクニックのみならず、詩に詠まれている思想や芸術観も漱石思想の究極と思われる「則天去私」にもつながり、多くの研究者に注目されている。『明暗』の執筆中、大正五年八月中旬頃から同年十二月九日逝去まで殆んど毎日一首のペースで、三ヶ月という短い間に七十五首の漢詩を詠じたのは相当の労力が必要と推測されるが、当時の心境について、久米正雄や芥川龍之介宛の書簡には漱石は次のように述べている。

> 僕は不相変「明暗」を午前中書いてゐます。心持は苦痛、快楽、器械的、此三つをかねてゐます。存外涼しいのが何より仕合せです。夫でも毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つ位です。さうして七言律です。[1]

大正五年八月二十一日に久米正雄にも芥川龍之介にも送った書簡であるが、『明暗』の連載が百回ほど続いたところ、小説を書くことが「苦痛」「器械的」になっている漱石は漢詩の創作によって「快楽」を得ようとしているという内容である。「苦痛」や「器械的」な心境からの遁れだったろうか、この時期の漢詩は自ずから「則天去私」とかかわっていたのであろう。とはいえ、七十五首の漢詩は全て「則天去私」その内質の反映とは限らない[2]。中村宏氏はそれについて、

---

1 『漱石全集　第二十四巻』1997.2.21 岩波書店 P554.555

2 佐古純一郎氏は、「従来、その問題は「則天去私」の問題として論及され、

次のように述べている。

> この時期の初期の詩には、老懐を叙べ、文人的な趣味思想、閑適な生活へのあこがれなどが詠われる中で、自然に「道心」が浮び上がって来るに過ぎない。その行きつくところが禅的な世界観であり、心の探究であったとしても、あくまでも「道」を課題として作ったかのような後半の詩とは異なるのである。この意味では九月五日の
>
> 絶好文章天地大。四時寒暑不曾違。
> 夭夭正晝桃將發。歷歷晴空鶴始飛。
> 日月高懸何磊落。陰陽黙照是靈威。
> 勿令碧眼知消息。欲弄言辭墮俗機
>
> を一つの分岐点とみてもよいであろう。特に十月の後半はこの種の“道の解説”的な詩の全盛期である。これは彼が「則天去私」を説いた時期とほぼ一致しているようである。（中略）禅学的色彩の極めて濃厚なものである。[3]

九月五日に詠じられた 157 番の「絶好文章天地大」という一首以降、死に至るまでの漢詩は、漱石が意識的にその“道の解説”を求めようとして詠じたものであり、「「則天去私」を説いた時期とほぼ一致している」という見解である。つまり、157 番の「絶好文章天地大」を一つの「分岐点」と見なし、その前の『明暗』時代の漢詩を前期、それ以降のは後期にと分けているのである。紙幅の関係で、今回は『明暗』時代の前期、つまり 134 番から 156 番までの二十三首の漢詩に焦点を絞り考察を試みる。後期の漢詩への考察は次の機会に譲る。

周知の通り、幼い頃より陶淵明や李白、王維など中国の文人に傾

肯定、否定の論が入り混じって未だに定説を得ない処であるが、私の見るところでは、肯定論も否定論も、あまりにも「則天去私」という字句にこだわって、漱石の真意を汲もうとしていないのではないか。」と、「則天去私」に束縛され過ぎないように、漱石の晩年の漢詩を理解する際にあるべき態度について見解を示している。佐古純一郎「漱石の漢詩文」(『講座夏目漱石　第二巻)』1982.2.25 有斐閣 P320)

[3] 中村宏『漱石漢詩の世界』1983.9.5 第一刷り 1983.10.5 第二刷り第一書房 P212

倒していた漱石は、随筆や友人への書簡[4]などにそれらの詩人の名に触れ、彼らの漢詩を小説に頻繁に盛り込んでいた。漢詩研究者である鄭清茂氏は、「こうした詩（漱石の漢詩―引用者注）の中に中国の唐詩、とりわけ王維の影が見えるのは否めない。然し、それは単なる模倣にとどまらず、漱石自身の心境も織り込まれている。この意味においては、漱石が正に日本の漢詩界での第一人者であることは疑う余地がなかろう。」（日本語訳―筆者、以下同）[5]と、漱石の漢詩は王維から大いに影響を受けたと指摘し、漱石の漢詩を高く評価している。これらのことから、漱石の漢詩が王維など中国の文人に影響されていたことは明らかであろう。しかし、例えば143番の「香烟一炷」にある「終日無為雲出岫」（陶淵明の「雲無心以出岫」を踏まえている）や144番の「寂寞光陰」にある「欲賦歸來未買田」（陶淵明の「帰去来辞」を作った時の心境を彷彿させる）、また147番の「不愛帝城」の首聯である「不愛帝城車馬喧」（陶淵明の「結廬在人境　而無車馬喧」という句を踏まえている）など、陶淵明の受容が見られることは既に指摘されている[6]。それ以外に、大地武雄、加藤二郎、上垣外憲一などの漢詩研究者[7]の研究はいずれも陶淵明と漱石との比較に偏っており、王維と漱石との研究はあまり注目されていないのが現状である。ゆえに、小論は自然への姿勢や自然と人間との関

---

4 例えば、明治四十年三月二十七日付け橋口五葉宛ての書簡には「篆字の義は別段よきもの無之王維の日落江湖白潮来天地青抔如何かと存候然し十字にて足らぬならば是非なく候。石闌斜点筆桐葉坐題詩もよろしかるべくか。」（『漱石全集　第二十三巻』P36）と王維の詩に触れた一節があり、また大正四年四月二十九日付け加賀正太郎宛の書簡には、「（七）曠然荘　王維の詩に曠然蕩心目とあります。（八）如一山荘 是も王摩詰の句です雲水空如一とあるのです。」（『漱石全集 第二十四巻』P417）と、加賀正太郎から山荘の命名の相談を受けた漱石が山荘の名に相応しい名を十四個挙げた。そのうち二個が王維の詩に因んだものと見えるのである。

5 「當然我們不能否認這些詩裏有唐詩，尤其是王維的影響，然而卻有漱石自己的心境，不只是模仿而已。在這方面，漱石無疑是日本漢詩中的第一人」鄭清茂『中國文學在日本』1981.10.4（1968.10 初版）純文學出版社 P35

6 中村宏『漱石漢詩の世界』（1983.9.5 第一刷り 1983.10.5 第二刷り第一書房 P230.232.237）を参照。

7 大地武雄「漱石晩年の漢詩と陶淵明詩」（『二松学舎人文論叢』第 17 輯 1980.3）／加藤二郎「漱石と陶淵明」（『日本文学研究資料新集　夏目漱石・作家とその時代』編者　石崎等　有精堂 1988.11／上垣外憲一「漱石の帰去来――朝日新聞入社をめぐって――」（『講座夏目漱石　第四巻』1982.2.5 有斐閣）

係などの問題を意識しながら、漱石の『明暗』時代の前半の漢詩に絞り、王維の投影の有無や漱石の再構築があるかについて考察してみる。そして、こうした考察を通して、漱石晩年の思想の凝縮と思われる「則天去私」を少しでも把握できることを図り、推論していく。

二、漱石『明暗』時代前期の漢詩にみる表現の傾向

漱石の『明暗』時代の漢詩にある真髄は「則天去私」の思想につながると多くの研究者に思われているが、この「則天去私」について、漱石自身も具体的には触れなかったため、今日までさまざまな解釈が可能性を競っている。

水川隆夫氏は漱石の日記や弟子たちへの話、また友人への書簡にある言葉を考察しながら、次のような見解を示している。

> 「則天去私」ということばは、最晩年の親鸞のことば「自然法爾」(『末灯抄』第五通)を想起させる。(中略)「自然法爾」においては、「自然」は「法爾」と同じ意味であって、阿弥陀仏の本願のはたらきによって、それ自身のもつ法則にのっとって衆生が救済されることを意味している。(中略)形のない「自然」を知らせる手段として形のある阿弥陀仏が存在するというのである。「自然」は究極の悟りの真理を表すものとして、「則天去私」の天＝自然と近いものであるといえよう。
>
> 「自然法爾」と「則天去私」との間のこの共通性は偶然ではなく、儒教や老荘思想や禅だけから説明することもできない。漱石の生涯にわたる浄土真宗との接触が、「則天去私」思想の形成にも影響を及ぼしたのである。[8]

氏は、禅及び浄土真宗など仏教の教義に結びつけながら、仏教の「自然法爾」との共通性を見い出し、「「則天去私」の天＝自然と近いもの」とのように、「則天去私」の真義を解いている。また、岡部茂氏は漱石の未完成の小説『明暗』と同時期に作られた漢詩を比べ

[8] 水川隆夫『漱石と仏教―則天去私への道』2002.09.09 平凡社 P173.174

ながら、小説の登場人物津田（漱石自身）と清子（大塚楠緒がモデル）との関係や、お延（漱石の妻である鏡子）などの心理を探り、『明暗』と漢詩の類似性を見い出し、「則天去私の具現者清子を求める作者の心が最高調に達していたことを物語って」おり、「ひいては清子＝漢詩なる止揚の世界「則天去私」が成立することも可能であり」と指摘しながら、「則天去私」の真意に迫っている[9]。つまり、人間関係、それに向き合う際の最も好ましい内面の境地を指しているのである。

一方、江藤淳氏は次のように述べている。

> これは必然的に、作家に於ける自己の内部の対象化を要求する。「道草」でこの態度は漸くうかがわれ、「明暗」ではかなり明瞭にうかがわれる。
>
> 更に一つのことをつけ加えるなら、「則天去私」は以上のようなものであると同時に、幼少の頃から漱石の心が求めつづけたかくれ家の象徴であった。現実逃避的な傾斜は、作家の生涯を通じての低音部をなしている。(中略) この低音部は中断されることなく晩年の小品や漢詩の世界へと持続する。[10]（下線引用者）

氏は「作家に於ける自己の内部の対象化」であるほか、「幼少の頃から漱石の心が求めつづけたかくれ家の象徴であった」と見なしている。このことが、具体的に何を指しているのか明白ではないが、「幼少の頃から」「求め続けた」という表現から、少なくとも晩年になって芽生えたものではないことは言えよう。また「かくれ家の象徴」とは内面を沈静させるような存在であり、それによって精神が最も安らぎを得られると捉えられるだろう。江藤氏のいわゆる「かくれ家の象徴」とは一見消極的な言い方のように思われるだろうが、その護身符のような存在によって精神が最も安らぐ状態になれるという結果を考えれば、岡部氏の「作者の心が最高調に達して

[9] 岡部茂『夏目漱石　「則天去私」の系譜』2006.11.10 文芸書房 P22-137
[10] 江藤淳『夏目漱石』1975.3.25 四刷新潮社 P15.16

いた」状況とも、また「「則天去私」の天＝自然と近いもの」という水川隆夫氏の浄土真宗的な発想とも相通じるところがあると捉えられるだろう。簡単に言えば、いずれも人間を含む「自然」との最善のかかわり方が即ち「則天去私」の最終目標である点で共通していると言えよう。

とはいえ、『明暗』時代前期の漢詩にはその要素が果たしてどれ程入っているのか、興味深い。上掲した中村宏氏の説によれば、『明暗』時代後期の漢詩は「この種の“道の解説”的な詩の全盛期」であり、漱石の「「則天去私」を説いた時期とほぼ一致して」おり、「禅学的色彩の極めて濃厚なもの」[11]としている。言葉を換えれば、「則天去私」をよく反映している『明暗』時代後期の漢詩は、禅的だと捉えられているのである。157 番の「絶好文章天地大」を一つの「分岐点」と看做すなら、これより前の『明暗』時代前期の漢詩は、即ち「則天去私」から隔たりがあり、禅的匂いがそれほど濃厚ではないと捉えても差し支えがなかろう。

さて、漱石が憧れていた文人画の始祖である王維は、仕官の不如意で都から少し離れた輞川という閑静なところに住居を構え、隠遁生活を始めたのはあらためて言うまでもない。そのような背景をもっている王維の漢詩、とりわけ晩年の漢詩には隠遁者の憧れる理想の境地が詠われ、また禅の具現とも思われている。前述した『明暗』執筆中の漱石の書簡に示してある「快楽」の底にあるのは漢詩作りによって得られる心境、あるいは王維など中国の文人たちのライフスタイルを漢詩の天地で試みた喜びとも考えられるだろう。よって、王維の漢詩で詠じられている境地や詩の表現を念頭に置きながら、本格的な「則天去私」に達する一歩前に創作した『明暗』時代前期の漢詩における表現や自然への姿勢などを考察するのもその時期の漢詩の真意、また当時の漱石内面の理解には有力な手がかりであろう。禅的要素や隠遁志向、また「自然」への姿勢[12]にかかわる表現

[11] 中村宏『漱石漢詩の世界』1983.9.5 第一刷り 1983.10.5 第二刷り第一書房 P212
[12] 上述した「自然」の意味に従えば、老いや白髪など身体の変化に対する詩人

などに焦点を絞り、この時期の漢詩を考察し、次のようにまとめてみる。

禅的要素	134	「随所随縁清興足　江村日月老来長」
	137	「借問参禅寒衲子　翠嵐何処着塵埃」
	139	「林塘日日教吾楽　富貴功名曷肯留」
	140	「薫薤臭裡求何物　蝴蝶夢中寄此生」
	143	「香烟一炷道心濃　趺坐何処古仏逢」
	144	「無他愛竹三更韻　与衆栽松百丈禅」
	150	「鳥声閑処人応静　寂室薫来一炷香」
	152	「曾参石仏聴無法　漫作佯狂冒世規」
	154	「道到無心天自合　時如有意節将迷」
隠遁志向	134	「座有詩僧閑拈句　門無俗客静焚香」
	135	「幽居楽道狐裘古　欲買縕袍時入城」
	136	「蓽門不杜貧如道　茅屋偶空交似雲」
	141	「尋仙未向碧山行　住在人間足道情」
	143	「終日無為雲出岫　夕陽多事鶴帰松」
	144	「春城日日東風好　欲賦帰来未買田」
	147	「不愛帝城車馬喧　故山帰臥掩柴門」
		「紅桃碧水春雲寺　暖日和風野靄村」
	149	「縹渺孤愁春欲尽　還令一鳥入虚空」
	150	「不入青山亦故郷／春秋幾作好文章」
		「鳥声閑処人応静／寂室薫来一炷香」
	151	「黄髯老漢憐無事　復坐虚堂独撫琴」
	152	「白首南軒帰臥日　青衫北斗遠征時」
	154	「独往孤来俗不斉　山居悠久没東西」
	155	「散来華髪老魂驚　林下何曾賦不平」
独座	143	「香烟一炷道心濃　趺坐何処古仏逢」
	150	「坐到初更亡所思　起終三昧望夫蒼」
	151	「黄髯老漢憐無事　復坐虚堂独撫琴」

の悲しみや不安などの心境も対象と看做せる。

愁い・寂寞	138	「驚残楚夢雲猶暗　聴尽呉歌月始愁」
	139	「透過藻色魚眠穏　落尽梅花鳥語愁」
	142	「愁中片月三更白　夢裏連山半夜青」
	144	「寂寞光陰五十年　蕭条老去逐塵縁」
	146	「蕭条古仏風流寺　寂寞先生日渉園」
	148	「経来世故漫為憂　胸次欲攄不自由」
	149	「縹渺孤愁春欲尽　還令一鳥入虚空」
	155	「遥望断雲還躑躅　閑愁尽処暗愁生」
老い（華・白髪）	134	「幽居正解酒中忙　華髪何須住酔郷」
	135	「双鬢有糸無限情　春秋幾度読還耕」
	138	「行到天涯易白頭　故園何処得帰休」
	139	「老去帰来臥故丘　蕭然環堵意悠悠」
	140	「両鬢衰来白幾茎　年華始識一朝傾」
	144	「寂寞光陰五十年　蕭条老去逐塵縁」
	151	「黄髯老漢憐無事　復坐虚堂独撫琴」
	152	「白首南軒帰臥日　青衫北斗遠征時」
	155	「散来華髪老魂驚　林下何曾賦不平」
掩柴門	136	「蓽門不杜貧如道　茅屋偶空交似雲」
	146	「陰尽始開芳草戸　春来独杜落花門」
	147	「不愛帝城車馬喧　故山帰臥掩柴門」
	152	「先生不解降龍術　閉戸空為閑適詩」

詩句の前につけてある番号、及び表記もすべて『漱石全集　第十八巻』（岩波書店）に従っている。なお、同じ漢詩に幾つかの項目が盛り込まれていることもあるため、その漢詩が二回以上挙げられる可能性もあることを断っておく。

以上の考察から、この時期の漢詩には隠遁世界や隠遁志向、また禅的雰囲気[13]を詠う作品が少なくないことは明らかであろう。実際、

[13] 渡部昇一氏は「仏教関係語の多いことは少年時代からのことであるが、『明暗』時代のものは特に甚しく、在俗の人の詩とは思い難いのが多い。」と、漱石晩年の漢詩が隠遁志向や禅的雰囲気そのものの反映であることを指摘している。渡部昇一『漱石と漢詩』1973.5.10 初版　1975.9.10 再版英潮社 P67

隠遁者世界や隠遁志向が織り込まれている漢詩の数が最も多く、十三首にも上り全体二十三首の詩の 56.5%を占めており、禅的雰囲気や禅の境地などが詠われているのが九首、39%であることが判明している[14]。王維など中国の隠遁者の漢詩から、隠遁世界やまた隠遁者の心境が禅に至る、というより禅が隠遁者の究極の境地とされていたことがうかがえる[15]。『明暗』の執筆が百回ぐらい重なると、「器械的」な退屈さを紛らわし、「苦痛」を和らげるには、漢詩の世界、虚構の隠遁世界に安らぎや慰めを求めようとしたのが想像できる。実は、この隠遁世界や文人の世界への憧れは子供の頃からすでに芽生えていたようである。それは修善寺の大患後に綴った『思ひ出す事など』という回想文からうかがうことができる。

> 或時、青くて丸い山を向ふに控えた、又的爍と春に照る梅を庭に植へた、又柴門の真前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、家を見て—無論画絹の上に—何うか生涯に一遍で好いから斯んな所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の真面目な顔をしけじけ眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるかと左も気の毒さうに云つた。[16]

修善寺で三十分の死を経験した後、漱石が昔の思い出を色々と思い出しながら綴った随筆文である。上掲したのは子供の頃から南画に憧れ、友人に文人の隠遁世界に住んでみたいという心境を語った一節である。「青」い山、「柴門の真前を」小川が流れているのは、つまり、人気があまりない辺鄙なところであり、これだけでも既に隠遁の雰囲気がたっぷり醸し出されているが、更に「的爍と春に照る梅を庭に植へた」という最も快適な季節である春、また生命感に

---

[14] 例えば 134 番、143 番、144 番、150 番、152 番、154 番など、隠遁志向及び禅の境地を両方兼ねて歌っている漢詩も少なくない。

[15] 呉啓楨『王維詩的意象』2008.05 文津出版社有限公司／蘇心一『王維山水詩畫美學研究』2007.05 文史哲出版社／嚴七仁『大唐盛世 王維在輞川』2005.5 三秦出版社／師長泰主編『王維研究（第二輯）』1996.8 三泰出版社 などを参照した。

[16] 『「思ひ出す事など」漱石全集 12 巻』P427

溢れる春という条件が具えられている空間を指しているのである。漱石が隠遁の世界や南画の美しい風景に言及する際、春に拘る傾向がある[17]。さて、この『明暗』時代前期の漢詩に虚構として現れる隠遁世界は果たして依然として春に固執するだろうか。この隠遁世界と思われる十三首の詩のうち、春と設定されているのは、134 番の「花間宿鳥振朝露　柳外帰牛帯夕陽」、144 番の「春城日日東風好　欲賦帰来未買田」、147 番の「紅桃碧水春雲寺　暖日和風野靄村」、149 番の「縹渺孤愁春欲尽　還令一鳥入虚空」、151 番の「空山有影梅花冷　春澗無風薬草深」との五首が挙げられる。これは隠遁世界が織り込まれた十三首の詩の 38%を占めており、量的には決して多くはない。そして、134 番・144 番・147 番の三首は喜ばしい春の雰囲気が感じられるが、残りの 149 番・151 番は生命力が溢れる春のイメージとは隔たりがあると思える。即ち、同じく隠遁に憧れていた「題画詩時代」[18]にある明るく、生命力に溢れる春のイメージは、上掲した『明暗』時代前期の五首の漢詩に至ると、弱まり、春の躍動感が衰えているのが著しくなっている。例えば 134 番の「座有詩僧閑拈句　門無俗客静焚香」、147 番の「不愛帝城車馬喧　故山帰臥掩柴門」、151 番の「黄髯老漢憐無事　復坐虚堂独撫琴」など、いずれも座禅のポーズか、部屋に篭っている雰囲気の詩句である。これは一体何を意味しているだろうか。

---

[17] 『草枕』で、俗塵の煩いから遁れようとして旅に出た画家が奥山に向かったのは菜の花が満開している麗らかな春と設定されている。『虞美人草』では、腹違いの妹藤尾や継母である「謎の女」から暫らく遁れようとして、甲野が友人の宗近と出かけた旅先は南画の風景と思われる春の京都と設定されている。隠遁世界の象徴と思われる南画につながる「題画詩時代」の作品は 40 首あるが、そのうちはっきりと春を詠嘆しているのが 19 首にも上っている。このように漱石は隠遁を考える際、春という季節に拘るのがうかがわれる。

[18] 漱石の漢詩は五期に分けられており、第四期である「題画詩時代」は「大患直後」の次にあり、合わせ 39 首の漢詩が含まれている。（中村宏『漱石漢詩の世界』昭和 58 年 9 月 5 日 第一書房）／佐古純一郎「漱石の漢詩文」『講座夏目漱石　第二巻』1982.2.25 有斐閣／鄭清茂『中国文学在日本』1982.10 純文学出版社などを参照。）「明治四十三年の十一月から中断していた漱石の作詩は、一年半後の「春日偶成」をきっかけに再び始り、断続して大正五年の春に至った。この時期の詩は画趣に富み、特に大正元年以降は自分の画に題する詩がかなりの部分を占める。」（上記中村宏『漱石漢詩の世界』P169）という、中村宏氏の言葉の通りに、この時期の漢詩は漱石自身の南画作品に題するか、あるいは後画を描くつもりで先に詠んだ漢詩が殆んどである。

それは、隠遁志向や禅的雰囲気の項目以外の、これらの漢詩に頻出する表現と関係が有ると思える。143 番の「趺坐何処古仏逢」、150 番の「坐到初更亡所思」、そして 151 番の「復坐虚堂独撫琴」など、いずれも一人坐るという表現が盛り込まれ、坐っている詩人の背中の寂しさが印象的である。更に、愁いなど寂しい気持ちにつながる表現が現れているのが八首、そして「双鬢」「白頭」「老去」「黄髯」[19]「老漢」など年取った、老いて行くと年を感慨している表現が使われている詩が九首あり、きわめて目立っている。一度死を経験したとも言える六年前の修善寺の大患で人生に対する考え方が大分変り、それ以来持病の胃潰瘍が何回も再発したためであろうか、五十歳になった漱石は死を間近に感じ始めたのである。そのような心境の下で漱石は漢詩の創作に臨んでいる際、前のように漢詩の隠遁世界をひたすら戯れることにとどまれなくなり、今度はその世界に入り込み、座禅しながら自己を内省するポーズに変ったと推測できる。146 番の「春来独杜落花門」、147 番の「故山帰臥掩柴門」、152 番の「閉戸空為閑適詩」など、外の世界を閉ざすような表現はいずれもその心境の反映と看做すことができよう[20]。

三、王維の芸術の世界を継承しながら、再構築した漱石

さて、この『明暗』時代前期の漱石の漢詩には、陶淵明の影響があったことはすでに指摘されているが、もう一人漱石の憧れの中国の文人王維の受容は如何なる程度のものであろうか。

まず、134 番の「随所随縁清興足　江村日月老来長」について、渡部昇一氏は「良寛の「随縁且従容」と同工異曲といってよい」[21]と

[19] 呉啓楨は、「人少則髪黒，老則髪白，白久則黄」と髪の色の持つ意味について語っている。呉啓楨『王維詩的意象』2008.05 文津出版社有限公司 P124

[20] 漱石の「春来独杜落花門」（146 番）、「故山帰臥掩柴門」（147 番）、「閉戸空為閑適詩」（152 番）などの、戸を閉ざすような表現は文人の隠遁姿として多用されていることは、王維の影響を受けたとも考えられるが、王維には「山居即事」―「寂寞掩柴扉　蒼茫對落暉　鶴巣松樹偏　人訪蓽門稀　嫩竹含新粉　紅蓮落故衣　渡頭燈火起」という例以外に、「掩柴扉」という表現は殆んど見当たらない。

[21] 渡部昇一『漱石と漢詩』1973.5.10 初版　1975.9.10 再版英潮社 P66

指摘している。確かに、尾聯の二句は首聯の「座有詩僧閑拈句　門無俗客静焚香」とは照応しているように、禅的雰囲気が濃厚で、良寛の詩句と相通じる点は否めない。が、第二聯の「花間宿鳥振朝露　柳外帰牛帯夕陽」は王維の「田園樂」(七首之四)「牛羊自歸村巷。童稚不識衣冠。」(牛も羊も勝手に村に帰ってくる。わらべたちは役人の制服なんぞみたこともない)[22]、また「渭川田家」にある「斜光照墟落。窮巷牛羊歸。」の風景をも彷彿させ、夕暮れになると、牛などの家畜が帰途に向かう、という長閑な田園風景、即ち隠遁者の理想郷の描写で両者が一致しているのは明らかであろう。これは漱石が王維の影響を受けたとも言えるが、異なる部分を見落としてはならない。上述した通りに、仕官の不如意で王維は都から少し離れた輞川という閑静なところに住居を構え、隠遁生活を始めた。そうした条件のもとで、輞川の周りの最も気に入った風景を選んで詠った有名な「輞川集」も、農民の生活に焦点を合わせた数多くの田園詩[23]も、劉文剛氏が「王維の田園詩は真実に富んでいる。その真実こそが芸術の生命であり、王維の田園詩はいずれも生活の匂いに溢れている。」[24]と賞賛しているように、写実的な傾向がありながら、芸術的で美しく詠われている。この「田園樂」(七首之四)も「渭川田家」も夕暮れの田園風景の片隅が生き生きと描かれており、「童稚不識衣冠」や「野老念牧童　倚杖候荊扉」や「田夫荷鋤立　相見語依依」などの描写によって、キャンバスに人間が加わり、しかもコ

---

[22] 小林太市郎・原田憲雄『漢詩大系　第十巻』1964.8.30 株式会社集英社 P191

[23] 例えば、「過友人莊」―「故人具雞黍。邀我至田家。綠樹村邊合。青山郭外斜。」や「輞川別業」―「不到東山向一年。歸來纔及種春田。雨中草色綠堪染。水上桃花紅欲然。優婁比邱經論學。偃僂丈人鄉里賢。披衣倒屐且相見。相歡語笑衡門前。」など農村生活や田園風景を生き生きと描いた田園詩としてよく知られている。([唐]王維　撰[清]趙殿成　箋注『王右丞集箋注』中國古典文學叢書 1998.3 上海古籍出版)また、蘇心一氏の統計によれば、王維の詩の中で最も数の多いのは自然を詠じる詩で、90 首に上り、そのうち、山水を詠嘆するものが 70 首、田園を詠うのが 20 首ある。(「王維畢生作詩數目最多的是九十首自然詩(山水詩七十首，田園詩二十首)」蘇心一『王維山水詩畫美學研究』2007.05 文史哲出版社 P125)

[24] 「王維的田園詩具有真實性。真實是藝術的生命，王維的田園詩總是充滿濃郁的生活氣息。」(劉文剛「王維田園詩淺論」『王維研究(第二輯)』師長泰主編 1996.08 三泰出版社 P194)

ミュニケーションが穏やかに交わされている、温かい生活の匂いが読者の所まで伝わり、ユートピアと思われる世界が目の前に広がってくるのである。このように王維の隠遁生活もそれを詠った漢詩も完全に世俗に背を向けているものではなく、田圃や畑の仕事をするまでは至らなくとも自ら田園生活に関心を示し、周りの農民たちと頻繁に交流している姿が容易に想像できる[25]。言葉を換えれば、王維は自然を愛し、自然に溶けこんでいると言えよう。一方、漱石の漢詩の方は殆んどがフィクションであることは明らかである。今回考察している二十三首の漢詩のうち、隠遁世界につながる風景を詠ったのは 134 番・140 番・147 番・154 番・155 番の五首を挙げることができるが、田園生活と思えるのは 134 番の「花間宿鳥振朝露　柳外帰牛帯夕陽」の一箇所にとどまっている。田園に家畜及び人間を点在させるという王維的漢詩の配置とは異なり、漱石のこの漢詩にはそのような風景は見当たらず、詩人は田園と家畜という自然に焦点を合わせながら、詩人は遠いところにいる、文字通りにながめているのである。その眺め――心によるながめ――を通して、詩人は安らぐことができ、内面では隠遁者の心境に至ることができたのかもしれない。漱石の漢詩は、王維の隠遁姿勢を継承したのみならず、都会から離れられない一知識人の内面による隠遁スタイルを再構築したと看做せはしないだろうか。

次に、漱石の 150 番の漢詩と王維の「秋夜獨坐」を並べて比較してみよう。

（漱石）不入青山亦故郷　春秋幾作好文章
　　託心雲水道機尽　結夢風塵世味長
　　坐到初更亡所思　起終三昧望夫蒼

[25] 王維の研究者である厳七仁氏は「王維が田圃の仕事に携わっていたと言っても、農民かぶりの文人に過ぎないだろう。とはいえ、輞川に隠居生活をしていた期間中、農民の生活にかなり親しむようになった一大変化を評価すべきだ」と言及している。(「若真要説王維曾作過耕夫，那充其量也不過是文人耕夫而已。盡管如此，王維在輞川隠居期間卻有一個了不起的進步，那就是他和農耕生活的距離變得很近了。」嚴七仁『大唐盛世 王維在輞川』2005 年 5 月 三秦出版社 P125)

鳥声閑処人応静　寂室薫来一炷香

（王維）獨坐悲双鬢　空堂欲二更
雨中山果落　*燈下草蟲鳴*
白髪終難變　黄金不可成
欲知除老病　唯有學無生

両者とも、主人公が明け方か夜中まで起きているという情況の設定であり、その心境が詠われている詩である。漱石の「不入青山亦故郷」は静かな夜、「鳥の囀り」を聴く、王維の「獨坐悲双鬢」では虫の鳴き声が聞こえてくる。そうした中、漱石の方は「寂室薫来一炷香」によって、王維の場合は「唯有學無生」[26]という心境の変化を通して、それぞれ禅の境地に達しているという点で一致している。ここでは、漱石の「鳥声閑処人応静　寂室薫来一炷香」及び王維の「燈下草蟲鳴」と言う表現に注目したい。勿論両方の詩の主人公とも室内にいるが、王維の「燈下」という表現は前の「雨中山果落」の「雨中」に合わせるために工夫された表現であろうが、この表現によって、主人公が向かっている机か座禅している場所が壁のところに位置されており、虫が主人公の手の届くほどすぐの「燈下」にいるという錯覚が起こることになり、主人公が虫など自然界との間に距離を置かず、一体になっているイメージが生成するのである。一方、漱石の漢詩には、そのような表現が見当たらず、鳥の鳴き声も外の人間の声も静まった時、室内にいる主人公は座禅のために立てたお線香の匂いにふと気付いたと描写されている。王維に較べ、漱石の場合は「我」のいる場所と鳥や外の人間とはある程度隔たっていると捉えられ、つまり、「我」が自然のなかに融合しているとは

[26] 厳七仁氏の説によれば、「無生」とは大乗仏教の「寂滅」であり、「涅槃」の境地に相通じており、「生」にも「滅」にも拘らない「無」の真義とされている。(「“無生”之説，出自大乘般若空觀，是“寂滅”和“涅槃”的另一種表達方式。在王維喜愛和熟稔的《維摩詰經》中，就有“無生無滅是寂滅義”的説法。又云：“觀於無生，而以生法負荷一切。”換言之，無生就是不生，不生故不滅，無生無滅，方能以生法負荷一切。」嚴七仁『大唐盛世 王維在輞川』2005 年 5 月 三秦出版社 P92

思いがたいのである。この詩からも、漱石は王維の漢詩を意識しながら、自分のこだわりから抜け切れず、あるいは自分ならではの、自然における「我」のポジションを再構築した詩人の姿勢がうかがわれよう。

さて、漱石の 154 番の漢詩及び王維の「鳥鳴磵」はどこまで類似しているだろうか。比較する便宜上、漱石の方は、王維の詩を彷彿させる部分だけを掲載しておく。

（漱石）巌頭昼静桂花落　檻外月明澗鳥啼
道到無心天自合　時如有意節将迷

（王維）人閒桂花落　夜靜春山空
月出驚山鳥　時鳴春澗中

下線が引いてある部分から、閑静な空間に、「桂花」が散っており、明月が空のかなたに掛かっている夜、せせらぎの音が聞こえ、鳥がそのせせらぎの冷たさに驚いてしまった、という山の一角の風景描写で両者がほぼ一致しているのは明白であろう。「鳥鳴磵」が収められている「輞川集」は王維の最もよく知られている詩集であり、その中の「竹里館」は、漱石の『草枕』の中で語り手に理想の境地とされ、その詩句が小説に盛り込まれている点から、王維のファンである漱石が「輞川集」を読んでいた可能性は十分に有り得るし、その中の詩を意識しながら、漢詩の創作に臨んでいたとも考えられる。

王維のこの詩の境地について、張暁明氏は、「人間が自然に溶け込み、または自然が人間を融合させる、という双方の交流を通して、詩人は内面の観照を行いながら、静寂の美を究極の地にまで発揮させることができた」[27]という見解を示している。「桂花」が散っている風景、月の光の冷たさに驚いて啼いた鳥、更にせせらぎの流れる

[27] 「因為花落無意，月出無為，鳥鳴無心，其本身就是一種閑靜的生命運動，（中略）在這裡，審美主客體之間顯然不是單向交流，既不是緣景生情，也不是情感外射，而是自然“神遇”，冥合融一。在人的自然化與自然人化的雙向交流中，詩人實現了對內在生命的自我觀照，把靜美的價值提升到前所未有的境地。」（下線引用者）張暁明「試論王維山水詩的空靈之美——兼及莊學本體論對王維的浸潤」（『王維研究（第二輯）』師長泰主編 1996 年 8 月三泰出版社 P153）

音など、この山にあるすべての視覚的なものにも聴覚的なものにも、主人公は静かに眺めたり、聞き入ったりしている。つまり、主人公自身も自然に点在している一存在にすぎない、自然と一体化しているという境地の詩である。

一方、漱石の方はどうであろう。「道到無心天自合」という一句がこの詩のポイントであるのは言うまでもなかろう。松岡譲氏は、「無心になった時、始めて人の道は天の道に即した事になるもの」[28]と解釈している。中村宏氏は、更にこの詩のモチーフについて、この句で、「いわゆる則天去私の思索の筋道を、これまでになくはっきりと示したものといえよう。去私（無心）はおのずから則天（天自合）であり、則天はすなわち去私の道である」[29]と、「則天去私」に結びつけながら、この一句の真義を見ている。ここでは、松岡氏は「則天去私」には言及していないが、「無心」＝「天の道」と捉えており、中村氏の方は「去私」＝「無心」＝「天自合」＝「則天」、つまり「則天」も「去私」も「無心」も同質の境地であると言う見解を示している。「則天」と「去私」との関係はまだ深く考える余地があるかもしれないが、「無心」＝「天の道」という点では両氏の意見が一致していると言えよう。水川隆夫氏は「ここでいう天＝自然＝大我の存在なら、「理性的な」認識活動の成果としての科学的真理と矛盾せずに共存し得る宗教的真実として信じることができると考えたかのようである。（中略）「自然」は究極の悟りの真理を表すものとして、「則天去私」の天＝自然と近いものであるといえよう。」[30]と仏教を軸に「則天去私」の真義を解き、天、即ち自然であると看做している。氏の説に従えば、「天」、「天の道」は自然[31]そのものと解釈することができ、王維の「鳥鳴磵」で詠じている自然との融合という境

[28] 松岡譲『漱石の漢詩』1966.9.30 第一刷り 1967.2.20 第二刷り 朝日新聞社 P195
[29] 中村宏『漱石漢詩の世界』1983.9.5 第一刷り 1983.10.5 第二刷り 第一書房 P249
[30] 水川隆夫『漱石と仏教―則天去私への道』2002.09.09 平凡社 P170.174
[31] 周知の通りに、漢詩以外に『草枕』や『三四郎』、『それから』などの小説にも「自然」という言葉が頻出しているが、漱石の小説における「自然」という表現は漢詩のなかにある「自然」とは必ずしも同質のものとは言い切れない。

地と相通じていると捉えられ、即ち、漱石の 154 番の漢詩は王維の「鳥鳴磵」と同じく、人間が生きている根本的な問題を意識し、自然にあるべき人間の位置づけを見い出したと考えてよかろう。

とはいえ、王維の「鳥鳴磵」は「我」という存在は感じられないほど自然に既に溶け込んでいる状況に対して、漱石のは「道到無心天自合」という、条件的表現であるため、その境地に至っているとは言い切れず、あくまでも詩人の願望であり、理想であるとしか言えない。

四、結び

第二節で先行研究を踏まえながら、「則天去私」の内質を確認してみた。やや単純な解釈ではあるが、このように「則天去私」の根底を具体的な表現に還元することができれば、以上の『明暗』時代前期の漱石漢詩の考察、及び王維の漢詩との比較より、それらの漢詩の特徴を「則天去私」の内質に沿いながら次のように結論を纏めることができる。

（1）禅的な隠遁者世界への傾き――

坐禅や、隠遁志向の表現の多い点から、この時期の漱石は子供の頃から憧れていた文人のライフスタイルを江藤氏がいう「かくれ家の象徴」として、求め続けている傾向があったと言えよう。王維など中国の文人の隠遁は禅につながることが多いが、必然的とは言い切れない。一方、漱石の場合は早期や中期の漢詩に比べ、この時期の漢詩には禅を意識している詩人の姿勢が強く感じられる。

（2）衰えていくわが身への嘆き――

王維にも「獨坐悲双鬢」(「秋夜獨坐」) のような老いに対する感慨の詩はあるが、漱石の場合、王維に比べ、それが圧倒的に多い。「双鬢」「白頭」「老去」「黄髯」などの表現の頻出や「愁」「憂」などの心情表現の多用から、持病に苦しみ、五十歳になった漱石が人生の終わりが近づいていることをうすうすと感じ、いらいらしている心

境[32]がうかがわれる。特に 155 番の尾聯の「遥望断雲還躑躅」「閑愁尽処暗愁生」は詩人の孤独や寂しさ、または憂いが重なっている重い心境、禅境地に至らない焦り、不安などの表れとも捉えられるだろう。

（3）「自然」に完全には馴染めない漱石――

漱石の漢詩にある隠遁世界は殆んど虚構であることは明らかであろう。そのためであろうか、隠遁世界を詠っている漢詩には「復坐虚堂独撫琴」（151 番）、「故山帰臥掩柴門」（147 番）、「閉戸空為閑適詩」（152 番）などのように、視点を常に室内に据えたり、隠遁世界にふさわしい簡素な「柴門」を構えていながら、柴門を閉ざしたりする設定が目立っている。一方、王維の場合は例えば、「輞川閒居贈裴秀才迪」のなかの「倚杖柴門外　臨風聴暮蟬」や「竹里館」の「獨坐幽篁裏　彈琴復長嘯」などにあるように、夕暮れに蝉の鳴き声を聞く場面にしろ、琴を弾きながら歌う時でも、漱石とは異なり、身を外に構える傾向が見られる。更に「田父荷鋤至，相見語依依」（「渭川田家」）、「披衣倒屐且相見　相歓語笑衡門前」（「輞川別業」）、「故人具雞黍　邀我至田家」（「過友人荘」）など、農村に焦点を合わせ、詩人自身も農民と語ったり、笑ったりしてその田園風景の長閑さを心より味わっているのである。つまり、漱石は「花間宿鳥振朝露　柳外帰牛帯夕陽」などの句にあるように自然に憧れてはいるが、少なくとも『明暗』時代前期の段階ではあくまでもそれらの「自然」（人間を含む）とはまだ隔たりがあり、遠くから田園風景を眺めているとしかいいようがない。一方、王維の場合は、「北窗桃李下　閑坐但焚香」（「春日上方即事」）のような外の世界と隔絶する心境もあるが、「田夫荷鋤立　相見語依依」や、「倚仗柴門外　臨風聴暮蟬」などにあるように、農民やその生活に近づき、それらの自然に我の

[32] 呉啓楨氏は「「白髪」は老いてきたことの象徴であり、人生においての苦しみや苦労などをも物語っている。よって、老いることはさまざまな辛さや感慨が湧いてくるのである。」とその象徴及び心境を述べている。（「白髪」象徴歳月的累積，也象徴人生中蒼桑與不堪，年華老去當令人有許多的辛酸、感慨。」）呉啓楨『王維詩的意象』2008.05 文津出版社有限公司 P106

居場所を見出し――自然に融合している――姿勢[33]が強く感じられる。

中村宏氏の指摘[34]に従って、「則天去私」の「去私」を「道到無心天自合」（154 番）の「無心」と捉えることができるなら、『明暗』時代前期の漱石の漢詩の中には、その境地に達しているものはないとは言い切れない[35]が、まだ少ないと言わざるを得ない。何故なら、漱石は「白頭」「老去」など自己の身体の変化にあまりにも気を取られすぎ、そのため春に向かった際にも、鳥の囀りや花の美しさを目の前にしても、我を忘れることができずにいる。「閑愁尽処暗愁生」（155 番）と、憂いの心境に陥っている自己を見詰めてばかりいるからであろう。「自然」は依然として自己の外部にあり、自己は相変らず「自然」を他者として見詰める存在である。とはいえ、漱石ならではの隠遁「生活」を味わっていたことは否定できない。このように漱石の漢詩は、王維の隠遁姿勢を継承しただけではなく、都会から離れられない一知識人の内面による隠遁スタイルを再構築したとも言えよう。

[33] 張曉明氏は、「彼は偶然で精神のよりどころ、生命の居場所を見つけた。大自然に自分のすべてを任せ、水の流れなど宇宙の運行に従っている。」（「他無意中找到了精神的家園和生命的歸宿，全身心地投入到大自然的懷抱裡，應和著宇宙的無意識，隨水而行，」張曉明「試論王維山水詩的空靈之美――兼及莊學本體論對王維的浸潤」）と、王維の詩にある自然とのかかわりを言及している。（『王維研究（第二輯）』師長泰主編 1996 年 8 月三泰出版社 P150）

[34] 中村宏氏は「去私（無心）はおのずから則天（天自合）であり、則天はすなわち去私の道である」と、「則天去私」に結びつきながら、154 番の「道到無心天自合　時如有意節将迷」の真義を捉えている。中村宏『漱石漢詩の世界』1983.9.5 第一刷り 1983.10.5 第二刷り　第一書房 P249

[35] 例えば、134 番の「花間宿鳥振朝露　柳外帰牛帯夕陽　随所随縁清興足　江村日月老来長」や 154 番の「道到無心天自合　時如有意節将迷」などが「無心」の境界に達していると言えよう。

テクスト

『漱石全集』全 28 巻（岩波書店）1993～1999
王維の漢詩は[清]趙殿成　箋注『王右丞集箋注』1998.3 上海古籍出版社

参考文献

《中国語参考文献》
嚴七仁（2005.5）『大唐盛世 王維在輞川』三秦出版社
呉啓楨（2008.5）『王維詩的意象』文津出版社有限公司
師長泰（1996.8）『王維研究（第二輯）』三泰出版社
蘇心一（2007.5）『王維山水詩畫美學研究』文史哲出版社
張曉明（1996.8）「試論王維山水詩的空靈之美――兼及莊學本體論對王維的浸潤」『王維研究（第二輯）』師長泰主編三泰出版社
鄭清茂（1981.10（1968.10 初版））『中國文學在日本』純文學出版社
劉文剛（1996.8）「王維田園詩淺論」『王維研究（第二輯）』師長泰主編三泰出版社

《日本語参考文献》
江藤淳（1975.3.25）四刷『夏目漱石』新潮社
岡部茂（2006.11.10）『夏目漱石「則天去私」の系譜』文芸書房
加藤二郎（1988.11）「漱石と陶淵明」『日本文学研究資料新集 夏目漱石・作家とその時代』編者 石崎等 有精堂
上垣外憲一（1982.2.5）「漱石の帰去来――朝日新聞入社をめぐって――」『講座夏目漱石 第四巻』有斐閣
小林太市郎・原田憲雄（1964.8.30）『漢詩大系 第十巻』株式会社集英社
佐古純一郎（1982.2.25）「漱石の漢詩文」『講座夏目漱石 第二巻）』有斐閣
大地武雄（1980.3）「漱石晩年の漢詩と陶淵明詩」『二松学舎人文論叢』第 17 輯

中村宏（1983.10.5）『漱石漢詩の世界』第一書房
水川隆夫（2002.9.9）『漱石と仏教―則天去私への道』平凡社
渡部昇一（1973.5.10 初版（1975.9.10 再版））『漱石と漢詩』英潮社